

北茨城・五浦の六角堂や旧天心邸といった岡倉天心関連の史跡を管理するとともに、天心の思想や功績を研究し、地域の人々とともに発信している茨城大学。

明治の終わり、天心が日本美術院を五浦の地に移すにあたり、多大なる支援を行った茨城新聞社。この両者が、国内外から研究者が集まった「茨城大学 国際 岡倉天心シンポジウム 2016」の開催を記念してコラボレーション。天心の思想を現代に伝える特別な新聞「五浦タイムズ」を皆様にお届けします。

天心とは何者か――



ボストン美術館に勤務

米国でフィラデルフィア万博などを契機に日本への関心が高まり、モース、フェノロサ、ビゲローが相次いで日本を訪問した。彼らは日本の文化人らと交友し、たくさんの貴重な古美術を収集し、ボストン美術館に送った。だが、日本文化に精通した人材がおらず、同美術館での展示はエキゾチックの域を超えなかった。岡倉が同美術館に勤務してから、モースらの収集品は整理され、各時代の最高傑作が展示され、日本の美術、文化、歴史を紹介できた。同美術館の日本ギャラリーは西洋と対等の扱い。岡倉は、ボストン美術館は西と東が出会う場所という意味を持つと語っており、これからもうありたい。



(アン・ニシムラ・モース／米ボストン美術館日本美術課長)

新時代の女性たちをリード

岡倉は米国北東部でイザベラ・スチュワート・ガードナーやサラ・ジェーン・ファーマーから自立したエリート女性らと交友することにより、社会的な名声を得た。二人はそれぞれ、米国滞在中の岡倉や横山大観、菱田春草らをもてなした。イザベラは日本を訪れたことがあり、アジアの宗教への興味が深く、岡倉らを支援した。サラは夏のリゾート地グリーンエーカーで宗教や哲学の講義を開催していた。新たに見つかったグリーンエーカーのサイン帳に岡倉や大観らのサインがあり、ここを訪れていたことが分かった。ここで岡倉はスピーチするようサラに頼まれたに違いない。

(ビクトリア・ウェストン／米マサチューセッツ州立大准教授)

宗教の近代化へ、インド訪問

岡倉は、シカゴ万国宗教会議で行ったスワミー・ヴィヴェーカーナンダの演説に感銘を受け、彼を日本に招くためインドを訪問した。この目的は果たせなかったが、ヴィヴェーカーナンダは岡倉をヒンドゥー寺院や仏教遺跡に案内し、多くの著名人を紹介した。岡倉は滞在中、イギリスからの独立を目指すインドの政治に巻き込まれたが、岡倉の本意ではなかった。

二人は同年でカリスマ性を備え、東洋に誇りを持っていた。ヴィヴェーカーナンダは、世界は一つという考えを持つ本質的に精神性の人であり、岡倉は文化の人だった。二人はお互いの国を尊敬して、若者に相互訪問を呼び掛け、今日に続くインドと日本の友好の礎を築いた。

(スワミー・メーダサーナンダ／日本ヴェーダ学会会長)



天心の思想と現代的意義を探る



日本の近代美術の発展に貢献し、晩年は本県・五浦を拠点に活躍した岡倉天心（本名・寛三、1863～1913年）の思想と現代的意義を探ろうと、茨城大学と五浦・天心地域復興プロジェクト実行委員会は9月3日、水戸市内のホテルで「茨城大学国際岡倉天心シンポジウム2016」を開催した。日米印の研究者ら6人が天心の実績や思想をそれぞれ紹介し、天心は何者かを多角的に迫り、世界の文化交流に大きく貢献した天心像を浮かび上がらせた。

翌4日は、天心ゆかりの地を巡る「北茨城市

五浦探訪」を行った。

シンポジウムは、東日本大震災の津波で流失した五浦・六角堂の復興支援に対する謝意を広く示そうと、六角堂を所有する茨城大が産学官と幅広く連携して企画、茨城新聞社は創刊125周年を記念して共催した。

シンポジウムを契機に、茨城大学は天心研究の進展、天心を顕彰する人たちのネットワークづくり、天心の愛した五浦を核にした地域振興に貢献していく。

日本美術院を創設

日本美術院は岡倉天心先生が創設した日本で最初の日本画の美術団体だ。教師なし先輩あり、教習なし研究ありの綱領を基に、今日まで歩んできた。

日本には3つの大きな日本画の団体がある。院展、日展、そして創画展とあるが、現在最も多くのファンを持ち、美術愛好家の方々に愛されているのが院展ではないかと思う。

天心先生が日本画の本質として最も重要視されていたのが絵画の中における四次元の世界の空気感だと思ふ。時代を経て絵画そのものも変化してきたが、日本美術院はその空気感を大切な指針として守ってきたし、これからも守っていく。巨人・岡倉天心先生は美術史家であり、思想家であり、教育者であった。

(那波多目功一／日本美術院理事)



文化財保護に尽力



東京大学を卒業後に文部省に入った岡倉天心は全国古社寺の調査や欧米視察出張などを精力的に行い、美術行政の基礎を固めた。廃仏毀釈の中で多くの文化財が失われる中、文化財は国が守っていかなければならないとして文化財保護に力を入れた。海外における保存の様子も学び、積極的に制度を吸収していった。

日本固有の文化を継承し発展させていくとして日本美術院をつくるときには、第二部として修復部門を設けた。この第二部は公益財団法人美術院という名称で現存している。

岡倉天心が努力して文化財保護に力を入れたが、日本の文化財保護の現状は海外に比べて予算的にも充実しているとはいえないのが現状だ。

(青柳正規／前文化庁長官)

六角堂と「茶の本」

人生という大海に適切に自らを合わせるのは「永遠にむかって反転していく大波に歓喜と美がある」からだという。ここに、岡倉が六角堂を「観瀾亭」（大波を観る東屋）と名付けた理由がある。「茶の本」は、六角堂に座る岡倉寛三の姿をイメージしながら読むべきだ。

五浦での岡倉の生活を隠棲とか、休養とみる考え方があるが、むしろボストンでの活動を熟成発酵させる積極的な意義を認めるべきだと思う。このことは、六角堂の建築を含む五浦の地の改装を積極的に進めたことから裏付けられる。岡倉は五浦とボストンを往復する中で六角堂と「茶の本」を作り上げた。

「茶の本」は、いまだに各国語での再版を重ねている。六角堂は1907年の観月会に数百人の人を呼び寄せて以来、現在でも年間数万人の入場者がある。六角堂は私たちの身体を世界(海のリズム)に溶け込ませ、「茶の本」は、私たちの精神をこの世界に溶け込ませる。岡倉にとって「茶の本」は現在を永遠とするための美の教典である。

(小泉晋弥／茨城大教授)



「茶の本」とオペラ「白狐」



「茶の本」は、アジアと日本の文化を西洋世界に発信するとともに、芸術と宗教の普遍的なあり方を語りながら、「茶」という日常の小さな出来事が創り出す調和と心の交流を、世界規模で説いている。作品はそれ自体では完成しない。鑑賞する人がそれに心を動かされて、初めて美となり、芸術となる。この心の交流が「不完全」の崇拜である。

岡倉が最後に執筆したオペラ台本「白狐」は、日本の民話を題材にしつつ、母親の愛情と別れの悲しみという普遍的なテーマを持つ物語である。主人公の狐コルハと、人間ヤスナの子どもは、相容れない二つの世界を結びつける奇跡である。コルハが子どもに渡した魔法の玉は、二つの世界に調和をもたらす未来を予言する。「茶の本」には、東洋と西洋を暗示する二匹の龍が玉を争う場面が描かれる。この玉は、「白狐」の魔法の玉と響き合う。「白狐」は、芸術を通して東洋と西洋が理解しあい、世界が調和することを願った岡倉の白鳥の歌である。

(清水恵美子／茨城大准教授)

Contents

2 3 五浦から世界へ 4 北茨城市五浦探訪

“五浦コーヒー” 五浦から天心に ちなんだ商品を発信

茨城大生ら
(株)サザコーヒーと再現



シンポジウム会場で「五浦コヒ」をいれる
茨城大生 2016年9月3日 水戸市内

五浦から天心にちなんだ新商品を発信。
国際岡倉天心シンポジウム2016に合わせて、茨城大学が学生や地域住民、企業との協働で新商品「五浦コヒー」を開発し、同シンポジウム会場で発売した。五浦周辺でも販売している。
新商品開発は、天心の代表的著作The Book of Tea「茶の本」で、「まあ、茶でも一口すすろうではないか」と記していることから、同大は「新しいもの好きな天心が21世紀に生きていたら、日常的に飲むのはお茶ではなくコーヒーだったのでは」と推測。一杯のコーヒーから、地域住民らが集うコミュニケーションの場へと発展することなどを目標としている。
天心が晩年の10年間にボストンで飲んだと思われるコーヒーの味を忠実に再現したというサザコーヒーの鈴木晋志男会長は「天心が五浦とボストンを往復するようになった1904年から10年ほどでアメリカンコーヒーが急速に普及したことから、天心も現地の人とコーヒーを楽しんでいたと想像できる」と説明。当時、ボストンで流行していた浅煎りシティ・ロースト・コーヒーを「癖のない爽やかな味に仕上げた」と話す。
発売した「五浦コヒー」はカップの上にコーヒーパックを直接乗せてお湯を注ぐカップオンコーヒーで、1箱5パック入り税込み800円。シンポジウムの休憩時間に学生らが参加者らが「五浦コヒー」を試飲を勧めてPR、用意した商品が売り切れる人気だった。また、五浦探訪の際も、天心邸で珈琲茶席が催された。



「五浦コヒ」



シンポジウム会場で試飲を楽しむ来場者



シンポジウム会場で販売も



六角堂と『茶の本』から 天心の思想をひもとく

「五浦の10年」を再評価

岡倉天心が五浦を拠点に活動した晩年の10年間は、隠棲の時代、苦難の時代というイメージで語られることが多かった。だがシンポジウムを通して、この時代こそ、ボストン美術館勤務、六角堂建築、『茶の本』出版などの活動が集中し、もっとも国際的に活躍したことが明らかになった。閉会にあたり、影山俊男氏（茨城大学理事・社会連携センター長）は、六角堂など「天心遺跡」を管理する茨城大学が、天心研究の一拠点となり、「五浦の10年」を再評価・発信するとともに、社会とのさらなる連携を図っていききたいと述べた。

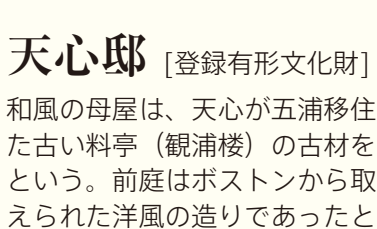
茨城大学五浦美術文化研究所

北茨城市にある茨城大学五浦美術文化研究所は、旧岡倉天心邸・六角堂・長屋門の寄贈を受けて、1955年に設立されました。これらの遺跡を管理するとともに、その業績をしのび、日本の近代美術や内外の文化・歴史研究や「観月会」などの取り組みを行っています。



長屋門 [登録有形文化財]

杉皮葺きを竹で押さえたひなびた造りの屋根が、百年あまり前の五浦の面影を伝える。現在は遺跡の管理室・受付として使用。使いながら保存するという登録有形文化財の主旨に合致した建築。



天心邸 [登録有形文化財]

和風の母屋は、天心が五浦移住当初に住まいとした古い料亭（観浦樓）の古材を用いて建築されたという。前庭はボストンから取り寄せた芝生が植えられた洋風の造りであったといわれており、取り合わせの妙が光る天心らしい邸宅といえる。



六角堂

太平洋に臨む岸壁の上に立つ、天心遺跡のシンボル。杜雨の草堂である六角亭子の構造＝中国、朱塗りの外壁と屋根の上の如意宝珠は仏堂の装い＝インド、内部に床の間と炉を備えた茶室としての役割＝日本、というアジアの3つの伝統思想が建物全体で表現されている。

■所在地：北茨城市大津町五浦727-2 ■電話：0293-46-0766
■休館日：毎週月曜日（月曜日が祝日の場合はその翌日）・年末年始
■入場料：300円 ■ホームページ：http://rokkakudo.izura.ibaraki.ac.jp/

茨城大学図書館2016年度後期企画展 岡倉天心(覚三)の遺産展 —木村武山の代表作《小春》公開—

1906年、岡倉天心(覚三)が茨城県五浦に日本美術院を移転し、近代日本画の歴史は大きく動きました。岡倉が没した後、横山大観を中心とした弟子たちは再興日本美術院を組織し、理想的な日本画を作り上げます。木村武山の《小春》は、その記念すべき第一回展に出品された渾身の力作です。その他、茨城大学が所蔵する安田靉彦、酒井三良らの作品や資料を展示し、天心が残した業績を振り返ります。

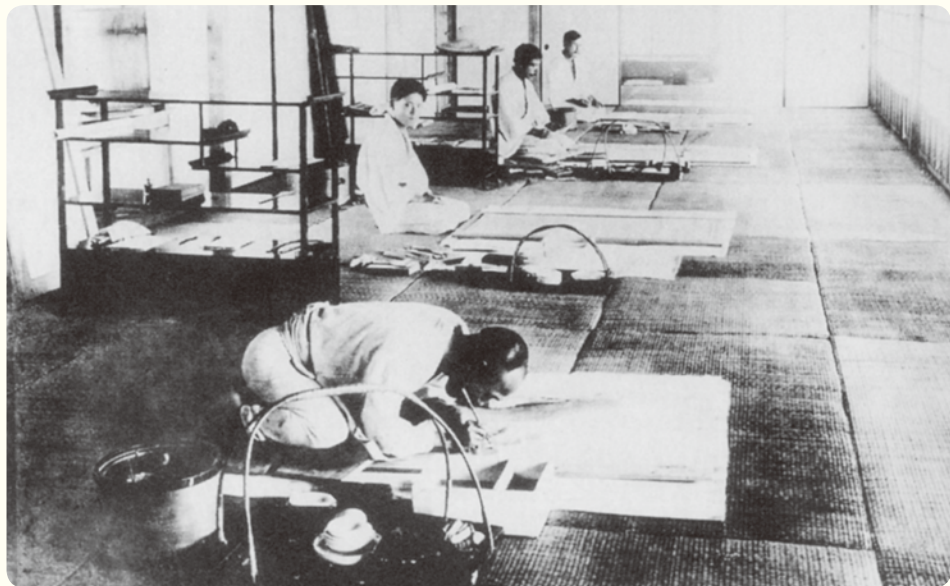
【会場】 茨城大学図書館本館1階展示室
【会期】 2016年11月5日(土)～11月27日(日) ※11月23日・26日は休館日
平日10時～16時 土日11時～17時 【入場料】 無料
【主催】 茨城大学図書館 【共催】 茨城大学五浦美術文化研究所



観月会のとき、近親者たちと記念撮影



東日本大震災で流出後、再建された六角堂



天心陣連の常設展が
記念五浦美術館
化研究所



1900年代初頭のボ
ストン美術館全景



五浦の断崖上に建てら
れた日本美術院研究所

五浦から世界へ

〈インド〉×〈ボストン〉×〈五浦〉×〈宗教〉×〈文化〉×〈芸術〉

多様な文化つなぐ 国際交流の「秘訣」

アン・ニシムラ・モース氏(米ボストン美術館日本美術課長)は「岡倉は文化、芸術について影響力のある人物だった。ボストンの著名人と付き合い、日本に対する米国人の考え方を変えた。能力にたけた政治家家だと思う。相手の考えをよく解釈し、理解した」と指摘。ビクトリア・ウェストン氏(米マサチューセッツ州立大准教授)は「岡倉は自分の考えやイメージを注意深く語った。書や絵画などを個別に語るのではなく、全体をパッケージ化して見せることができた」と芸術、文化を伝える能力を称えた。
スワミニー・メータサーナンダ氏(日本ヴェダータ協会会長)は「岡倉が西洋と東洋をどう結び付けたかったのかということに焦点を当てれば、現在も、政治的、経済的に世界が一つになることはできないが、文化では一体化できると考える」と天心の業績を再評価。小泉晋弥氏(茨城大教授)は「天心はインドで入るのが難しいヒンズー教寺院も訪れ、帰国したときはインド人の恰好(僧侶の衣装)をしており、現地に溶け込んでいただろう。岡倉は現地の文化というもののポイントをとって見極めて、飛び込んでしまう人だったと思う」。
清水恵美子氏(茨城大准教授)は「天心は、武士や外国人が入り出す横浜の商館や日本橋で育ち、日本と西洋、武士と商人といった多様な文化を吸収、親しんだ。大人になってからも欧米、中国、インドを旅し、文化を相対化する視点をつかんでいった」と天心の文化交流能力を肯んだ背景を強調した。



スワミニー・ヴィヴェーカーナンダ



ラベンドラナート・タゴール



マサチューセッツ州で天心(前列左)と写真に納まるガーランドナー夫人(後列右)

アメリカの新世紀の宗教文化のメッカ グリーンエーカー訪ねる —「自然美、五浦と共通」



釣り姿の天心 (明治40年ごろ)
＝北茨城市五浦

「茶の本」が世界的ベストセラーになり、ボストン美術館中国日本美術部長を務めるなど米国での活躍と五浦時代との関係について、ウェストン氏は「五浦の自然美は、グリーンエーカーと共通点がある。自然によって癒やされ、リフレッシュされ、さらに世界の真実とつながることができる。五浦の画家は積極的に自然だけでなく人生にアプローチすることによって成功したのだと思う」と話し、メータサーナンダ氏も「五浦は何度も訪れたが、自然を大切にすると日本で、岡倉が休息を取れる場所を求めたのはよく分かる」と五浦の素晴らしさに言及した。
小泉氏は「以前、インド人研究者に五浦を案内した時に、詩人タゴールの学校の風景とそっくりと言われた。清水先生もスワミニー・ヴィヴェーカーナンダのガートと似ていると分析している。ウェストンさんの講演を聞いて、グリーンエーカーと天心の関係、グリーンエーカーと五浦が似ていることを知り、目を開かれた。いずれも聖地であり、天心が五浦を選んだ理由が分かった。天心は『茶の本』で、分裂した東西を結びつけるには女媧のアバター(化身)が必要と書いているが、天心は自らアバターとして生きようとしていたのではないか」との見方を示した。
清水氏は「天心はボストンと五浦を何度も往復している。ボストンでの文化活動と五浦での活動は相反するものではなく、表裏でつながって連動している。今回のシンポジウムを通して、「文化は交流できる」をキーワードとして受け止めた。天心は、世界を一つにするのは文化の力だと信じてきたから、また東西の文化は対等だと自信があったからこそ進むことができた」と話した。
天心の釣り好きに話題が広がった。モース氏は「平櫛田中作の岡倉の釣りの絵を見て、理解できなかった。3年前に自分で釣りを始めてから、五浦のイメージは全く変わった。釣りは精神的なエクササイズ、別の世界がある」と、メータサーナンダ氏も「瞑想の場の意味があったろう。小泉氏は『釣り日記が残っていて、天心は夜中に釣り針を作るなど本気で、一方で、本を読んでいた釣り糸が引く張られても反応しないことが多かったという漁師の証言があり、釣りは本気半分」と指摘。天心の釣りにはリフレッシュや瞑想の役割が多分にあったと意見が一致した。

文化の力を信じて

岡倉天心の生涯

1863	文久2年	横浜に生まれる
1889	明治22年	東京美術学校が開校し、翌年、校長となる
1898	明治31年	東京美術学校校長の職を退き、日本美術院を創立する
1901	明治34年	インドに渡り、翌年にかけて仏跡等を巡る
1902	明治35年	「The Ideals of the East」(東洋の理想)を執筆、翌年、ロンドンで刊行する
1903	明治36年	五浦に土地と家屋を求める
1904	明治37年	米国ボストン美術館中国・日本美術部エグゼクティブになる
1905	明治38年	「The Awakening of Japan」(日本の覚醒)をニューヨークで刊行する
1906	明治39年	五浦の別荘を新築し、六角堂を建てる
1907	明治40年	「The Book of Tea」(茶の本)をニューヨークで刊行する
1910	明治43年	日本美術院第一部(絵画)の五浦移転に伴い、横山大観、下村観山、菱田春草、木村武山が同地に移り住む
1911	明治44年	仲秋観月の園遊会を五浦で開く
1914	大正3年	天心一周忌を期して、大観、観山らにより日本美術院が再興される
1942	昭和17年	天心旧居敷地内に「平櫛田中ハナリ」の石碑が建立される
1955	昭和33年	天心旧居と六角堂が、岡倉天心偉顕顕彰会から茨城大学に寄贈され、研究所が設置される
1963	昭和38年	茨城大の研究所に天心記念館が設けられる
1970	昭和45年	茨城大の研究所が「茨城大学五浦美術文化研究所」に改称
1984	昭和59年	日本美術院研究所跡地が日本ナショナルトラスト保護資産第1号になる
1997	平成9年	日本美術院研究所跡地の傍らに茨城県天心記念五浦美術館がオープン
2011	平成23年	東日本大震災で六角堂が流出
2012	平成24年	六角堂が再建される
2016	平成28年	北茨城市五浦の日本美術院研究所で制作した動西木村武山、菱田春草、横山大観、下村観山(手前から)
2016	平成28年	天心陣連の常設展が記念五浦美術館化研究所
2016	平成28年	東日本大震災で流出後、再建された六角堂

六角堂 六角堂の中から大海を望む＝北茨城市

「永遠にむかって
反転していく大波に
歓喜と美がある」
——『茶の本』より

北茨城市 五浦探訪

参加者の感想①

廃仏毀釈によって荒廃した寺院や破壊された仏像などの修理保存に奔走した天心。日本と海外から見た仏教美術品の認識の違いなど、3人の外国人からお話を伺えたことはとても勉強になった。天心は、お茶自体が「日本の宗教」とし、仏教を中核とする東洋思想を海外に広めるなど、天心の功績はさらに見直されるべきである。(那珂市菅谷の渡辺一洋さん)

天心の晩年に思いをはせる

茨城大学国際岡倉天心シンポジウム2016の第2日は9月4日、北茨城市五浦地区で「五浦探訪」を行い、参加者らは天心ゆかりの地で天心の活動や思想に思いをはせた。

参加した約100人が東日本大震災で被災し再建された六角堂や天心邸、県天心記念五浦美術館を見学し、天心邸での珈琲茶席を楽しみ、公演「天心オペラ『白狐』」を鑑賞した。

天心が最晩年に執筆したオペラ「白狐」の台本を指揮者の平井秀明さんが構成したハイライト公演は、横山大観邸を敷地内に持つ五浦観光ホテル別館大観荘で開催。平井秀明オペラ合唱団や妙高白狐倶楽部(新潟県妙高市)、ソプラノ歌手の佐竹由美さんが愛情と慈悲に満ちたステージを繰り広げた。



茨城大学五浦美術文化研究所の敷地内に残る天心邸



日本画を中心にさまざまな企画展が開かれている茨城県天心記念五浦美術館



参加者の感想②

記念講演や発表などを通して、天心の文化財保護への思いと、広い視野を持って東洋の魅力を世界に発信した天心の思想について理解を深めることができた。オペラ「白狐」も日本語で上演され、解説もとても分かりやすかった。10月29、30日には「天心サミット」が五浦で開催されるので、天心の精神や思いをまた学びたい。

(北茨城市中郷町の鈴木荘一さん)

①茨城大学国際岡倉天心シンポジウム2016では、天心が最晩年に執筆したオペラ「白狐」の上演も＝2016年9月4日、五浦観光ホテル別館大観荘



⑥岬公園から六角堂を望む。景勝地として知られる五浦海岸は、茨城県北ジオパークのジオサイトの一つでもある



④⑤天心邸では、茨城大学国際岡倉天心シンポジウム2016の企画で珈琲茶席が開かれた

「茨城大学 国際岡倉天心シンポジウム2016」は、多くのみなさまから、ご支援・ご協力をいただき、茨城大学社会連携センターが、企画・運営等にあたりました。

主催



共催



後援



協賛パートナー



五浦日本美術院岡倉天心偉績顕彰会 岡倉天心福井県顕彰会 いがた妙高岡倉天心顕彰会 江戸千家 岡倉天心横浜顕彰会 福井県立美術館

交流 地域のみならず、交流の輪を広げ、

連携 連携して創ろう、豊かな未来を！

茨城大学社会連携センターは、みなさまと茨城大学を結ぶ窓口です
社会連携センターは、地域の未来を描き、直面する課題の解決に取り組もうとする自治体、産業界、地域の皆さまと連携する協創組織です。

以下のような事業を担当しています。ご相談やお問い合わせをお待ちしております

- 企業とのパートナーシップ、企業や自治体からの共同研究、受託研究
- 市民や自治体職員との地域創生のためのネットワークづくり、セミナーの開催
- 教員・学生の、地域との協働のプロジェクトや地域志向活動(授業)等の支援
- 公開講座・公開授業など生涯学習の実施や社会教育活動の支援
- 茨城県北ジオパーク、五浦美術文化研究所、茨城大学COC事業、茨城大学基金など

茨城大学 Ibaraki University 茨城大学 社会連携センター

〒310-8512 水戸市文京2-1-1 TEL 029-228-8585 FAX 029-228-8495
メール renkei@ml.ibaraki.ac.jp ホームページ http://www.scc.ibaraki.ac.jp/



平成28年度文化庁 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業